憧れの国で

冨沢　佐一

「ふらんすへ行きたしと思へども…」と書いた詩人と同様、私にとっても憧れだった国。そのフランスを、原野昇先生とのご縁で初めて訪ねることができて大感激です。

広大な大地。歴史を感じさせる建物群、ジャンボな料理…。何もかも新鮮でしたが、私にとっては、「神」について少年時代のように考えさせられた１週間でもありました。

予定外のトルコ航空で隣同士となったのは、キリスト教をトルコで布教している日本人女性。神の存在に否定的な私が議論をふっかけると、問答は５、６時間にも及びました。

巡礼の聖地、コンクとロカマドゥール。気の遠くなる程の長くて苦しい道を巡礼した人々の心情に思いを馳せると、やはり「神」について考えざるを得ませんでした。

ロカマドゥールの岩壁には、願いが叶った感謝を記した板が多数貼られていました。現世御利益を神頼みする生き方を嫌ってきた私も、胸を打たれるものがありました。

二つの聖地で得た感慨は、パリのノートルダム寺院で一気に膨れ上がりました。壮大で荘厳な内部空間。精緻なステンドグラス。熱いものが心の奥から湧いてくるのを覚えました。

人間は病気や死、争いなどから逃れることができません。そのような苦しみを忘れる術の一方の極致が、ムーランルージュでの圧巻のショーではないでしょうか。

壮大な教会を築き、聖地へ巡礼した人々の心情。そこには、御利益を求めるだけではない何かが確かにある―。そんな思いが、旅行中に去来しました。

信仰の有無とは別に、人間の心の奥には大いなるものを求める何かがある、ラスコーの壁画を描かせたのかも知れないその何かとは―。そのようなことを帰路、考え続けたのでした。